

能舞台の光——光を発する人、浴びる人、  
その光を届ける人

## 七〇〇年前の世界への 旅立ちと冒険

ムーデイ 美穂

もう何年も前になるが、ある女優が番組出演中、スタジオの照明スタッフについて「子どもの時からその仕事をしたいと思っていたのだろうか」というような発言をし、テレビやSNS上で「スタッフを軽視している」と散々非難を浴びることがあった。確かにその女優の発言は軽率だったかもしれないが、そう言ってしまった気持ちはわからなくもない。美しく才能があり、若くして成功した女優は常に表舞台に立つ人である。その裏で、世間から華々しく注目を浴びることなく、額に汗して働く裏方たちの姿を見て「なぜ」と不思議に思い、それを素直に口に出してしまったのである。が、同時に、この女優さんはもしかしたら、舞台製作にチームの一員として参加した経験がまだないのかな、とも勝手に想像した。

学校演劇でもプロの劇団でも、舞台製作を経験したことのある人ならば、俳優・裏方に関わらず、舞台を作り上げることの楽しさと喜びは知っているであろう。舞台製作には当然ながら、演出や照明、音響、大道具、小道具、衣装、その他数えられないほどの役割が存在する。舞台へ足を運ぶ観客に、最高の作品を届けるため、それぞれの分野において、自分の持ちうる技術と知識を駆使し、それらが集約されて、舞台は成功する。裏方の仕事は役者の為だけにあるのではなく、また、役者は自分の

ことだけ考えていれば良いのではない。裏方と役者のコミュニケーションが、良い舞台を作る上での大切な要因である。

演劇におけるチームワークの大切さはスポーツに例えられることはよくある。そしてスポーツにおいて、圧倒的な力を見せてチームを率いていくスター選手がいるように、演劇にもスターは当然存在する。

演劇の目的が聴衆に最高の芸術を魅せるということであり（いくつかの政治的メッセージを伝えることが目的のものを別として）、そのためにチームワークは不可欠であるが、どうしても唯一人、舞台から光を放つてしまう表現者は存在する。そして、聴衆はその表現者の光を浴びるために劇場に足を運ぶ。舞台裏で活躍する人々も、かつてその光を浴び、その光を今度は観客に届けるため、力を合わせる。そのような化学反応を自然と周りに起こさせてしまうスターたちを、舞台から光を発する人々とするならば、観客はその光を浴びにくる人々、そして裏方は、かつてその光を浴び、その光に魅了され、それを多くの人に届けたい、と欲する人々ではないだろうか。

私自身といえば、当然ながらただの観劇好き、つまり光を浴びにせっせと劇場に通う範疇に属する人間である。演劇であれば、ミュージカルでもストリートプレイでも歌舞伎でも何でも観に行くが、能との出会いはまだ新しく、能楽堂のチケットを購入してから慌てて作品について勉強する、という俄かファンである。にも関わらず、二〇一八年より人間国宝である観世流シテ方能楽師大槻文蔵氏との知己を得る、という、ありえない幸運を得た。

知己というのは言い過ぎである。本学には「グローバルキャリア講義・現代国際学部特殊講義A」という講座があり、毎週、外部から各分野で活躍されている方々を講師として招聘している。日本画家や華道家、アウンサー、環境活動家、スポーツセラピスト、そして最近人気ユーチューバーなど、学生にとって普段なかなか出会えないような人々から現場のお話を聞くことができる貴重な機会であると思う。その講師の一

人として来ていただいた小説家の竹田真砂子氏が、ご好意で大槻氏を紹介くださったのである。聴衆となるのが本学一年生であるゆえ、当初は「もったいなさすぎます!」と竹田氏にお伝えしたのであるが、「大丈夫よ。先生は若い人たちに能を知って欲しいって思っているから」というお言葉に勇気付けられ、講義に向けて万事整え、大槻氏においでいただく運びとなった。

講義当日は学生や教職員、そして能楽研究者を含む学外からの聴衆で会場は埋め尽くされた。大槻氏はこざっぱりとした袴姿でさつそうと舞台上に登場し、能舞台で披露する謡とおもむきの違う、柔らかな静かな、でも良く通る声でお話しされた。若い役者さんをお連れになり、実演を交えてのお話は具体的で、学生に伝統芸能の前に立ちあがるハードル



を軽く越えさせてしまう魅力があった。

その後、数多くのインタビュー記事から、大槻氏が能を鑑賞する人々に関して危惧を覚えられていること、そのため多忙な時間を駆使し、全国各地の学校や自治体に足を運び、能楽の素晴らしさを広める活動をされているというのを改めて知った。それ以来、もう臆することなく講義をお願いし、毎年一度はご来校いただいている。

二〇二一年、まだ残暑の厳しい折、大槻氏より公演作品の解説書の英訳とイヤホンガイドのご依頼があった。

「何故ワタシに?!」と驚愕したのはもちろんである。ワタシのような素人が、大槻先生からの依頼をうかうかと引き受けていいのか? 間違いがあつたらどうする?! と自問した。が、それも一瞬のことで、引き受けすることとなった。

というのも、能のイヤホンガイドという仕事を一度やってみたいと思っていたからである。能の世界を、海外からの観客に知って欲しい、というごくまっとうな願いはもちろんあつたが、通っていた名古屋能楽堂のイヤホンガイドが、何故だかいつも、とても楽しそうに聞こえていたからである。

イヤホンガイドは、あらかじめ録音したものを流す場合と、その場で話の展開に合わせておこなうライブ形式がある。能楽堂やその時の主催者によって違いはあるが、名古屋能楽堂の場合はライブ形式が主であるように思えた。いつも背後にほんのわずかがざわつく気配があり、一度は「ガシャン!」という音とともに「きゃあ! ティツシユ、ティツシユ!」という声が聞こえてきた。ガイド中、お茶をこぼしてしまったようなのである。<sup>1</sup>私と同行したオランダ人の友人を含め、会場の外国人は皆顔を見合わせてニヤニヤしているという、なんだか楽しくなるようなアクシデントであつた。もちろん公演後、それについて何か物申す人もいなかった。その時のおおらかな感じは、私の中の能のイメージと結びついている。



伝統芸能を英訳するという作業は、私にとって荒海にボンコツ船で乗り出すような無謀な冒険であった。訳していく過程で、何度も「うわっ!」とのけぞったものである。

日本古来の風習や、仏教・神道に根ざした用語、官位などはそのままローマ字表記にすると、当然ながら解説文がローマ字だらけになってしまう。従って話の流れに影響が出ない程度に、多少の説明を挟んで訳すことが必要となる。プロの翻訳者にとっては当たり前のことであろうが、翻訳も能に關しても、ど素人である私にとっては、きちんと調べたにせよ、それでいいのだろうかと常に不安がつきまとった。また、日本語で読むと何ら違和感がないのに、英語に訳すと、直接的な表現になるせいか、読み返して「そうなの?」と自分でびっくりしてしまうこともあった。特に『源氏物語』第二卷「帚木」を基にした「菟」は美しく哀しい物語であるが、以下のあらすじを英訳すると、原作の美しさよりも、内容の特異さが目立ってしまうように思えて困った。……人妻である空蟬は、義理の息子の邸で光源氏と出会い、契りを結ぶ。それ以来、空蟬のことが忘れられない光源氏は、再度寝所に忍んでくるが、空蟬は拒絶する。三度目の夜、光源氏が寝所に忍び込むと、空蟬はすでに去った後で、一緒に寝ていた継娘の軒端萩と、薄衣一枚が残されていた。光源氏は人違いと知りながら、暗いことを理由に、残された軒端萩と契りを結ぶのである。

空蟬と軒端萩という二人の女性の光源氏に対する想いと、光源氏の人物像、『源氏物語』の世界観や当時の時代背景についての知識がなければ、この物語を理解することは難しい。

ボンコツ船が暗礁に乗り上げそうになったときは、大槻氏の書生さん——当時若干二十歳のIさんにSOSを送ることができたのはありがたかった。「書生さん」という人種が近代文学の中だけでなく、今の世に実在することにまず驚いたが、このIさんは、ひょっとしてハタチのお面をかぶった三十六歳なのでは?! と思わせるほど落ち着いて、知識豊富

な青年であった。「菟」の英訳に当たっては「あさきゆめみし」を読むといいですよ、と薦めてくれたのも彼であった。

常に心配だったのは、前述したように用語の意味や事実関係を正しく伝えられているかということ、そして物語の世界観をすべて正確に伝えることは無理でも、少なくともそれを壊してはいないだろうかという不安、そして作品の解説を執筆した専門家たちの趣旨を正しく伝えられているか、ということであった。この三点について、常に恐怖とも言える不安を抱えてはいた。にもかかわらず、この英訳の作業は実に楽しいものでもあったのである。

今まで知ることのなかった知識への扉がどんどん開いていく、という楽しさ嬉しさとともに、七〇〇年という年月を越えても、人の心と営みはそう変わらない、ということを感じることができたからである。言葉や装束、習慣は違っても、恋愛する心や嫉妬心、戦争に引き裂かれる人間関係、親子の情愛、出世をめぐる権謀術策など、今でも常に存在する。

演出家の平田オリザは、演劇というものを、人々の生活・人生の一部を切り取って、観客の前に突きつけるものであると述べている。観客は目の前の舞台で起こっている出来事を観ながら、自分たちの日々の生活・出来事に思いを馳せる。そこに生まれる共感、生きる力となって私たちの毎日をそとと支えてくれる。七〇〇年前、能舞台を観に集まった市井の人々も、きっと同じ思いで観に行くのを楽しみにしていたことだろう。そして能楽師たちは、そのような人々に応えるため、時代を超えて、手から手へ、——オリンピックの聖火ランナーたちがトーチを聖火台に届けるがごとく、私たちに光を届け続けてくれている。そして時を超えて走るランナーたち——能楽師は、世阿弥を始めとする創造者たちに選ばれた、光を発する表現者たちと言えるだろう。

能楽は室町時代からずっと、形をほぼ変えることなく存続し、私たちの生活を豊かにし続けてくれた。その類稀な功績を有する能という伝統芸

能は、世界規模で守られなければならない。いや、守るという消極的な行為ではなく、もっと積極的に世界中の人々に届けたい。何故なら、能はいにしえに生きた人々と現代に生きる私たちの間をつなぐバイブラインであり、自分たちの生活を映す鏡だからである。

そんなことを考えながら英訳に四苦八苦した九月は、厳しい残暑とは関係なく、冷や汗、脂汗をたくさんかいた。でも、心のどこかでは、日本が誇る伝統演劇を世界に届けるお手伝いを、ちょっとだけしているのかな……、とワクワクする気持ちもあった。怒涛のような、でも何にも代えがたい一か月であった。

## 注

- 1 二〇一四年くらいのことなので、今ではイヤホンガイドの状況もだいぶ変わっていると思われる。
- 2 能の形態の一つ。物語がワキの見る夢や幻の中で展開する。
- 3 大槻文藏「三番能『復曲の名曲を観る!』」チラシ 二〇二一年十月
- 4 前掲 二〇頁
- 5 前掲 二〇頁
- 6 前掲 八頁